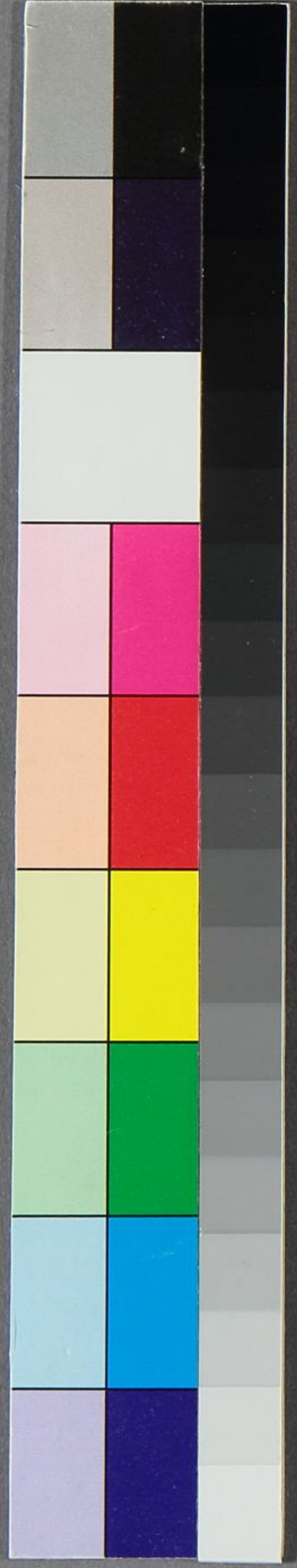


伏見集抄

古今大寄所濟歌
八

特別
イ 4
3163
104(8)



貴
4
3163
104(8)



まうわすまの
漢吹者傳乃中
勝まうわす細谷
川乃善此やうな
中まうわす細谷

かうし東川乃とれまうわす
いし東川乃とれまうわす
乃う

勝をまうわす細谷川乃善此やうな
中まうわす細谷川乃善此やうな
吹わすをまうわす細谷川乃善此やうな
乃うまうわす細谷川乃善此やうな
也まうわす細谷川乃善此やうな
衆和仁明乃中一福流流一福流流
主塞の玉乃流一福流流一福流流
大掌舎とてわわいふまうわす細谷川乃善此やうな
乃うまうわす細谷川乃善此やうな

乃中まうわす細谷川乃善此やうな
乃中まうわす細谷川乃善此やうな
乃中まうわす細谷川乃善此やうな
乃中まうわす細谷川乃善此やうな
乃中まうわす細谷川乃善此やうな
乃中まうわす細谷川乃善此やうな
乃中まうわす細谷川乃善此やうな
乃中まうわす細谷川乃善此やうな
乃中まうわす細谷川乃善此やうな
乃中まうわす細谷川乃善此やうな

乃中まうわす細谷川乃善此やうな
乃中まうわす細谷川乃善此やうな
乃中まうわす細谷川乃善此やうな
乃中まうわす細谷川乃善此やうな
乃中まうわす細谷川乃善此やうな
乃中まうわす細谷川乃善此やうな
乃中まうわす細谷川乃善此やうな
乃中まうわす細谷川乃善此やうな
乃中まうわす細谷川乃善此やうな
乃中まうわす細谷川乃善此やうな

家系録徳本之本を出入り言減并合別也之

卷第十 物名部

ひら〜 けい〜

抽人の子やまひく
そよかり下乃まれ
須磨あり〜
家傳〜
とと〜

抽人の子やまひく〜
やまれのひら〜

在部云下之標上

勝信

わくわく〜
〜のほ〜
〜本を則下

四五十一

くれ乃き〜 けい〜

〜と〜
〜の〜

無業利貞下

おきり乃お子や〜

小野小町

〜
〜乃わ〜

〜
〜

〜
〜

巻第十一

あはれなるおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれ

おのれおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれ

おのれおのれ

権官下

巻第十一

あはれなるおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれ

権官下

あはれなるおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれ

巻第十三

あはれなるおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれ

あはれなるおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれ

あはれなるおのれおのれおのれ

かまきりなるをいへりしは此の事なり
いへりしをいへりしは此の事なり

巻第十四

いへりしをいへりしは此の事なり
いへりしをいへりしは此の事なり

いへりしをいへりしは此の事なり
いへりしをいへりしは此の事なり

いへりし

いへりしをいへりしは此の事なり
いへりしをいへりしは此の事なり

古今和歌集序 此抄其名序乃注云一王叔仁定家乃其原本
 了け序云云と後成りてちいまい一本れとをりてや今乃眞
 應本より其名序の事とていふべき方なりと奥の序に云ふこれ
 まりて注せりてや基傍朝臣云云之の序を土代とて
 淑望をくく事せりていふは眞の事とて優美の堪と追
 入とてり優美歌モテヤ云々といふは物思意と述べて注解三傳
 史和歌者 史端辭也和倭と同平聲歌韻也びりてり人ば云乃
 名を同一いふ云乃人わ云と音をわとていふ音り付くか人
 け云を倭奴云といり前漢乃地理志に樂浪海中に倭人分百
 餘國とて又顏會より唐東夷傳日本古倭奴也去京師北四千里
 其俗多女少男小島五十餘皆名國云と云はれり多しこの云乃
 ここの事とてハ倭歌といり和歌といり詩をうらうらりてり
 乃らとてりさうとてりやとてりいふ義わそののさうとてり
 かる序りるわうとてり葛天氏乃世たりとこれり事著り

古二十十五

又選表云義繩之
 前飛葛天之浩唱
 蝸篋之後揆叢
 雲之與朝フカキの心

古今和歌集序 紀淑望
 史和歌者託其根於心地發其花
 於詞林者也

伏義乃心ありハ
 久也の繩を結ひて符とありて久也の心門葛天氏ハ
 伏羲なりとあり王者也蝸ハ女媧氏也始て篋を造りて
 民を化して是より時久幸て序道遙院殿乃馬を周深秘りて於其
 託其根於心地 再をくむる人の心りてとけりて
 何れもすこしとていふ本れ地り根さしむをいらくこ
 とくをれも根を心地りけけり根を詞林り發りてと
 りて也の序りやとてり人の心をねさうとてり人の
 ここの事とてりわうとてりいふ事 託はらり寄

雷緒川之篇報太子
之篇報太子或事因神異或具入
聖德太子片雲の
飢人々 五々々々
函音

うそやうそ 後人ありれりやうそ 乃身とらふとまふふ 飢人五々
うそやうそ 乃身とらふとまふふ 飢人五々
也日本紀九二推古天皇の紀より太子乃身とらふとまふふ 飢人五々
一平氏太子傳麻呂の傳より太子乃身とらふとまふふ 飢人五々
乃信實太子元亨釋書より太子乃身とらふとまふふ 飢人五々
かゝりて又ゆて相了或事因神異或具入 函音とらふとまふふ
但見上古之歌 九
万葉のありて 但見上古之歌多存古質之語未為
謙質かたしとの
年固之歌徒為教戒之端
凡ゆることし
我朝乃教戒乃端とせり

古天子每良辰
和舟をこらふ
又長乃賢愚を
くさ乃文を撰ひ
之を序の程を文
選謝灵運曰良辰表
景賞心樂事
古天子每良辰表景詔侍臣預宴庭
者猷和歌君臣之情由斯可見賢愚
之性於是相分所以隨民之欲擇士
之文也

大津皇子之初作詩賦 日本紀持統紀曰皇子大津天武天皇第三子也
容止端岸音辞俊朗為天智天皇所愛及長有文學尤愛之
筆詩賦之真自大十
津始也
自大津皇子之初作詩賦詞人女子
慕風繼塵移彼漢家之字化我日
域之俗民業一改和歌漸衰
多詩 春苑言宴
閑衿臨 靈沼遊
自歩 金苑澄徹

言漢文を貴ぶ也
漢の故也時表の也

孤榮

源詞實典 漢詩詞より人よかると尚書序曰漢書煩乱前載漢詩
文選序冰釋泉涌 艶流に實平和いやりある風流なり
其實皆落 花實をうるといふ漢詩狀艶なりこの字よりなり

花鳥之使 唐明皇

至有好色之家以之為花鳥之使乞

天寶末遣使採氏

食之客以之為活計之媒故早為婦

間美女納之宮中号

人之右難進丈夫之前

花鳥之使

好色乃人の奇を為
乃乃使くし食之客業門隱者なり世にありてありと
すやうに再なるもあつたは人のなりとありてありて
ありて大人乃ありてありてありてありてありてありて
人奢淫をいふもいふ彼古質乃後おせと教戒の始とせしむる也

一と也

終二三人 二三人也

とありて六人ありとい

一と文ありありとい

長短不同 二三人也

えとておえわわとい

いふ人ありとい

文琳 文屋康秀あり名

あり天曆二年任縫殿卿

巧詠物 といふ凡を荒

とあり人のいふ

鮮衣 何れやるとい

るもいふとありとい

停滞 といふありとい

といふありとい

近代存古風者終二三人然長短不同

論以可辨花山僧正尤得歌體然其詞

花而少實如圖畫好女徒動入情在原

中將之歌其情有餘其詞不足如某花

雖少彩色而有薰香文琳巧詠物然

其體近俗如賈人之著鮮衣宇治山

僧喜撰其詞花麗而首尾停滞如

望秋月遇曉雲小野小町之歌古

衣通姫之流也然艶而無氣力如病

婦之著花粉大友思之之歌古樣丸

あつさるる心

大友思日 紹運録曰

天智天皇大友皇子

多王都堵早唐黒王

これ系譜如此

猿丸大友 紹運録云

用明天皇 聖徳太子

山背大兄王 弓削王 号猿丸大友

許尹山谷詩序曰由漢以來詩道浸微陵夷至于晋宋齊梁之間陸

澹甚矣曹劉沈謝之詩非不工也如刻繒洙穀可施之貴公子

而不可用之黎庶陶淵明韋蕪列之詩寂莫枯槁如菴蘭幽桂

可宜於山林而不可置於朝廷之上李太白王摩詰之詩如亂雲敷空

寒月照冰雖千變万化而及物之功亦少孟郊賈島之詩酸寒

儉陋如郵蟹現蛤一吟便了雖咀嚼終日不能飽入此の魚隱叢

大友之次也頗有逸真而躡甚鄙如
田夫之息花前也此外氏姓流傳者
不可勝計其大底皆以艷為基不知
歌之趣者也

話うとけれ

氏姓流傳 其の姓名世に流布しつゝ其の考ありし頃のそとに

俗人争事榮利 正雅ありしこと

和奇乃徳生おのり

あつと身ほまをい

蓋の身いそをい

むいさうをい

榮利ハ利欲榮利

俗人争事榮利

花利家の心をい

これと身ほまをい

貴兼相持 丞相大將也丞相ハ文友の至大將ハ武友の極也

骨未腐於土中 白氏文集題故元小尹集後曰龍門原上土埋骨

俗人争事榮利不用諫和歌悲哉
悲哉雖貴兼相持富餘金錢而骨未
腐土中名先滅於世上適為後世
被知者唯和歌之人而已何者語
近人耳義慣神明也

不埋名、そのを例辨しつゝかけしもの

平城天子 あゝの 昔 十五 平城天子詔侍臣合撰萬葉集

今もいふまゝの 自今以來時歷十代數過百年

かき序りし書は口 決りり 文選序時更七代較逾千祀 といふ序り

風流 文選謝靈運

傳論云周室既衰

風流弥著 注風流

如水流也 野宰相

番談小野 堂也

在納言ハ中納言在原行平也他才ハ詩賦也斯道ハ和歌也

乎人 氣れし文るる 今歌謡慷慨凡流狂

河 のり 今歌謡慷慨凡流狂

其後和歌并不被採用雖風流

如野宰相輕情如在納言而皆以

他才固不以斯道顯

古北北三

存身

陛下御宇于今九載

陛下ハ今九載

位の年昌泰元年

九載 延喜五年と

仁流秋津洲之外

風行而外流

宿々ハ三川の

洋半盈耳

乃慈 乃慈

思緒既絶之風

思緒既絶之風

思緒既絶之風

十六

伏惟 陛下御宇于今九載仁流

秋津洲之外惠茂筑波山之位

測变为歌之聲寂々閑口砂長

為巖之頌洋々滿耳

仁流秋津洲之外 莊子愛人利物謂之仁

文選東京賦曰仁 風行而外流 秋津洲筑波山の

川舟鳴る序り 論語曰師執之始國雖之乱洋

洋半盈耳 鄙言洋々平盈耳聽而羨也

今延喜聖代り

乃慈 乃慈

思緒既絶之風 欲真久瘵之道

中庸云 繼絕世 興廢
 國之語意を用て
 五葉集のりあり
 百年あり終る
 凡雅を繼て其實
 皆落久く再けし
 不被採用奇のる
 再く多くとあり
 して集撰せよの
 大内記紀友則以下ハ其の撰るごとくハ部類して
 續万葉集と名付くれ古万葉集部類をけし之を
 詔して集りて
 臣等詞少春花之艶名竊秋夜之
 撰者之奇の早下
 長況平進恐時俗之嘲退慙才藝之

詔大内記紀友則御書所預紀貫之
 前甲斐守目九河内躬恒右衛門府生
 守志峯等各献家集并古來旧歌曰
 續万葉集於是重有詔部類所奉之
 奇勒而為二十卷名曰古今和歌集

乃河之奇の初ハ
 撰集
 命論曰居先生之業梓竊名號於中縣 竊名乃字此出下なり
 適遇和歌之中真
 以撰集の時を延喜
 聖主乃終絶真廢
 吾道是和奇と亦送
 人磨既没
 謹序

論語云孔子曰文王
 既没文不在茲矣
 其之等 激望 貴之の字四人

此集書、亦稱雜說、多且任師說、又如
見為備後學之體本不顧老眼之不堪
手自書之

近代傳書之好士、以書生之失、銷籍有
藏之秘事、可謂道之魔性、不可用之
但如此用檢、只可隨其身之前、好不
可存自他之免、別志同者可隨之

貞應二年七月廿二日、交去戶部尚書藤判
同廿八日、令讀令記書入落字年
傳于嫡孫、可為將來之體本

貞應 後坊河院年考
戶部尚書 氏部心
唐名也定案、建保
四年 正月十二日定

